

---

# ワンゲル行軍－羅臼岳編

介護さぶらい（かいごさぶらい）

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ワングル行軍—羅臼岳編

### 【NNコード】

N8548V

### 【作者名】

介護わがりい（かごいわがりい）

### 【あらすじ】

知床半島に聳える、羅臼岳。某大学ワングル部が、夏の部活に知床半島の踏破、行軍を計画。本隊と山越えの別働隊を組織。二人の別働隊は、山越え行軍を行うことになった。1967年8月頃、実話を元に書いたエッセイである。

## (前書き)

「人は、自然の一部である」ことを、ワングルの部活を通じて、知りました。40年以上前の実話です。自然は「優しくも、厳しくもない」。人間の世界の方が、・・・。

拠暁、パートナーと、阿吽の合図で、宿舎を出立。お互いに、表情を見合わせ。

「行こうか」相方が。

キスリングを確かめる様に、何度も、リュックの肩紐を、揺すり上げる。整備された登山道はない、山道は、先人が切り拓いた、そまだ。それを、辿る行軍である。

足場は、思った以上に悪そうな、山越えの行軍である。一昨日、北海道の旧国鉄、中標津駅前で、一人で野営。翌日、羅臼町入りし、宿舎に入った。

知床半島、羅臼岳を縦断し、反対側の岩尾別へ下りる。そこで本隊と合流し、知床五湖を巡る行軍である。

本隊は、斜里町から岩尾別へ向かい、ユースホステルで、山越えす

る一人を待つことになつてゐる。

半時間ほどで、山道入り口に到着。幅員は、狭い。先人の足跡を頼りに、登攀を開始。雑木林で覆われ、靄がかかり、視界は10数メートル先が見える程度。

あちこちに、脇道がある。殆どが、獸道だ。これに迷い込むと、命にかかる。登りは、良いが、下りは、獸道には細心の注意を払わなければならない。先人が切り拓いた山道か獸道か、を見分けながら、だ。

相方は、独特の歩を崩さない。息遣いも、安定している。彼の登山靴には、鉄が打ち込まれており、時折、山道にむき出した岩を噛む音がする。入山し、2時間ほどか、視界が、なかなか開けない。道が急に、立ち上がってきた。

相方も、それに気づいて。

「休もうか～」相方の手が、リュックに伸びてきた。相方が、脇道で、清水を見つけたらしく、リュックにぶら下げていた、アルミコ

ツプを外していたのだ。

「うん、ちょっと、この道はきつそうや」声をかえす。交互に、冷たい岩清水を飲む。タバコを取り出し、一服する。腕組しながら、二人で、見えない、山頂へ、煙を吐く。吸い終え。

「行くで〜」立ち上がってきた山道へ、向かった。小刻みに、小休止を繰り返す。岩肌が続く、山道。両手両足を使いながら、ゆっくり登攀。先人が削った、痕跡の残る、岩を踏み台にする。赤や青、紫、白等の、小さな花を足元に見ながら。

「ハ合田や、一氣に行こう」表情を、緩めて言つた。  
「ハ合田や、見て見いー」指差す、方向に、転げ落ちそうになつてゐる、巨岩と白い塊が見えた。万年雪の雪渓だ。人影も。相方を振り返つた。

八合目は、胸突き八丁だ。一番きつく、ガタイが鳴きそうになる。

「一気に」の声で、それを、吹き飛ばし、忘れさせてくれる。相方の気合で、色が変わった、急崖を、這いつくばって登攀。下を見るといつの中にか、数メートルの間隔を開けて、相方が。落石、滑落に備え、間隔を開けていたのだ。滑落したら、彼は、躊躇なく、反応するだろ？。

転げそうな、田畠にたどり着いた。万年雪の、雪渓にいた数人のパーティに、大声で。

「こらにちわー」と、挨拶。

「こらにちはー、こらにちはー、お疲れさんドーす」数人から、挨拶が返つて来た。静寂の中、声が透き通る。

「山岳部やな～」小声で、耳打ち。

「そりやな～」相方が、頷く。彼等の装備を見て、すぐに分った。巨岩の真下には、厚さ一メートルほどの万年雪の雪渓だ。黒ずんだ所や、純白の箇所、岩が飛び出し、冰雪のようになっている所。自然の計らいは、人智を超える。

「 、昼食にしようか～」登攀開始から6時間余り。頂上は、眼の前だ。緩やかな雪渓の上から、オホーツク海を眺められ、昼食を摂ることに。濃紺の海原が、眼下に果てなく、広がる。一度とは、観れないのだ。

「そりや～、おひ、それかせつ！」相方が、下ろした、リュックに吊り下げた、アルミカップを。万年雪を、掘り下げて、カップに詰め込んで。

「 、板チョコ入れてくれや」差し出してきた。

「オーケー」板チョコを、ナイフで、鱗ブシを削る要領で、削り、

雪の詰まつた、カップへ入れる。

「できたでー、ほい」手渡した。

「おまえなー、むつかよーと、薄~いに濡れや、「ロシロシやん」顔は、笑つてゐ。箸で、搔き混ぜながら、せつばゑ。

「噛み応えあつて、うまこやるー」笑顔で、応じる。

「まーな」苦笑に変わつた。登攀中に、気づいた、取り止めのない、話をしてくると、鎌山部の連中が、列になつて。

「お先にー」と、いちに向かつて、手を振つてゐる。

「は～い、気をつけてー」立ち上がって、一人して、大きく振り返えした。

カメラを持ち、雪渓上から、何枚か写真を撮っていた、相方が。

「バシャツー、ばしゃー」雪渓で、顔を洗い出した（アライ熊、みたいなやつやな～）。

「 、やつてみ～」二人して、雪の中へ、顔を突っ込む。巨岩の隙間から、巻き込むようにして、そよ、と、微風が顔をかすめる。汗が引き、ほてっていた身体が、冷めていく。

「サッパリしたな～、よ～し、だらだら、行くか！」声をかけた。

「ふふ～ん、だらだらか、よっしゃー」手早く、身支度。巨岩を、慎重に回り込み、頂上へ。緩んだ山道は、茶色から、深い緑に変わ

つた。頂きへの一面は、ハイマツだ。緑の中に、点々と、赤や紫、白、黄色の小花が覗く。半時間ほどで、羅田岳山頂へ出た。

「しーい、ひょっと待て！」キスリングを捕まれた。振り向くと。

「あそこ、 、 、「腰を下ろして、相方が、指をさす。ハイマツの間に、雀が、違った、良く見ると、リスだ。

「あっ！ 、 、「ゆっくり、腰を落とした。ハイマツの間を、止まつては、動き、を繰り返している。時折、こちらを見ている（おまえら、誰や、ってな様子見か）。相方のカメラのシャッターボンにも、動じない。逆に、少しづつ、近づいて来た。

「おー、 、 、「ちよよんで～」一メートルくらいか、で止まり。こちらの、顔を、覚えようとするかのように、チヨンと立ち上がり、キヨトキヨト、見比べている。納得したのか、踵を返して、ハイマツの海へ飛び込んで行つた。

「おまえの顔、みとつたど」相方が、笑顔で言ひ。

「あほいえ、おまえや～」顔を、見合わせ。

「そう言つことにしこか～、ふふつ、、、」一人で、笑つた。ハイマツに覆われた、山頂を横切り、下山を開始した。

「風向き変わつたんぢやうか～」微風だが、かすかに、風が下から、上がつてきていふ。

「そやな、よし、お前、先行せ～」下りは、相方を先に行かせた。登りとは、景色が全く異なつた。下りは、取り付きから、雑木林だ。雲間を突き破つて、歩を進める。人が滑つた痕跡が幾つもあつた。相方は、これを、見極めるのが上手い。彼の踏みしめた、足跡を確実に辿れば、何の心配もない。

「おい！、ポンチョ出せ」相方に、声をかけた。雲間を抜けると、小雨の場合が良くあるのだ。杣道は、直角に近く幾重にも折れ曲がっている。時間をかけているわりには、たいして、距離を稼いでいない。要するに、下つていないのだ。

「降ってきたな～」下から、小雨が吹き上げてくる。やがて、横殴りに。黄色いポンチョが、濡れて、顔に張り付く。

「あかん、小休止や」相方に声をかけ、雨をやり過ごすことにして。真っ暗になってきた。雲間に入ったのだ。下山開始から、休まず、4時間近くが経つた。キスリングが、堪えはじめた。両肩や足腰にて重みが。山道のカーブは緩んできている。麓が近いことは、経験で分る。と、薄暗い、樹海に、何かが光った。

「鹿やーー。」相方も、気づいて。

「おう、かなり、でつかいなー」鹿の田が、こちらを見たのだ。闇が下から、迫つてきている。もう、半時間もすれば、日が落ちるのだ。小降りになつた。相方を、促す。闇がどんどん、追いかけてくる。

「部隊旗やー」相方が、真下に、ランプの灯りが見え、オレンジに斜め十字の白線が入つた、旗が浮かび上がつてゐる（当時、岩尾別は、電気がなかつた）。

「よーし、イチ、ハチ、マル、ロク（午後18時06分）、山越え行軍終了」腕時計を見て。

「ピーッ！、ピーッ！」相方が、合図の笛を吹いた。数個のランプに照らされた、旗の灯り付近に、数人が集まつてきた。本隊の連中が笛の音で。古い木造の建屋の輪郭が。旧開拓農家の家を、そのまま使用している、岩尾別ユースホステルだ。そこから、飛び出してきたのだ。部隊旗を前にして、一列に並び始めた。

「お疲れさまーす！」横一列の全員が、二人に敬礼。午後6時17分だった。羅臼から、16時間余りの山越え、行軍が終了した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8548v/>

---

ワングル行軍ー羅臼岳編

2011年10月7日12時44分発行